

# 「書く」活動は発話の産出にどう反映するか

## —発話量と語彙の広がり度の計量的分析—

Do Writing Tasks Affect Speech Production? :

A Quantitative Analysis of the Degree to Which Quantity of Speech and Breadth of Vocabulary can be Increased by Performing Writing Tasks

村田 裕美子

MURATA Yumiko

ミュンヘン大学

Japan Zentrum, LMU München, Oettingenstr. 67, D-80538, Munich, Germany

Y.Murata@lmu.de

**Abstract:** This study is a quantitative examination of how interspersing a composition task between two speaking tasks with identical topics will affect content and quantity of the speech produced in the second speaking task. It demonstrates that performing such a writing task increases both the breadth of vocabulary produced and the level of abstraction in the second speaking task. The results suggest that a combination of writing and speaking tasks can lead to an increase in the overall competence on language production.

**キーワード:** 「書く」課題、発話量、語彙の広がり、計量的分析

### 1. 研究背景と意義

近年、外国語教育では言語運用力の重要性が高まり、日本語教育の現場でも「話す」活動が盛んになっている。しかし、海外の学習環境では(1)「話す」機会を十分に提供できない、(2)学習者に十分なフィードバックを与えられないといった問題がある。こうした現状をふまえ、学習者に産出とフィードバックの機会を平等に与えられる「書く」活動を「話す」活動のなかにうまく取り入れることができれば「話す」能力だけでなく、総合的な産出能力の向上につながられるのではないだろうか。本研究では、まず「書く」活動が発話の産出(アウトプット)にどのような影響を与えるかを明らかにし、第二言語習得の観点からの実証研究を試みる。

### 2. アウトプットの役割と視覚的補助

アウトプットには統語処理を促し、継続的に行うことで、言語知識の自動化を促進させる効果が認められている(Swain 1985, Levelt 1989)。また、メモなどの記述による視覚的、認知的な補助がアウトプットに有益であることも明らかになっている(Oxford 1990、菅原 2011、村田他 2013)。しかし、「書く」活動の有無と発話量の関連を計量的に分析した研究は少ない。

### 3. 研究課題

本研究では同じ課題で「話す」活動を2回行ったとき、1回目と2回目の間に「書く」活動が有る場合(実験群)と無い場合(統制群)で、

2回の発話の量と内容にどのような変化が生じるかを比較分析する。具体的には、作文が有ることで、発話量や語の量が増えるのか(分析1)、内容が変わるのか(分析2)を明らかにする。

### 4. データと分析方法

#### 4.1 データの概要

ドイツ国内の大学に通う初級から中級レベルの学習者32名に(1)と(2)の方法で発話のデータを収集した<sup>注1</sup>。(1)「住みやすい国の条件とその理由」について、時間制限を設けず、自分の考えを日本語で話せるだけ話してもらい、(2)(1)の一週間後、再び同じテーマで1回目と同様、時間制限を設けず、日本語で話してもらい、

客観テストSPOT<sup>注2</sup>の結果と学習歴からグループを2つに分け、実験群(17名)には(2)までに同じテーマで作文を提出してもらい、統制群(15名)には作文の課題を出さなかった。話すときはリソースの使用を認めていない。また、2回目にもう一度同じテーマで話すことは事前に知らせなかった<sup>注3</sup>。発話は録音、文字化した。

#### 4.2 分析方法

##### 4.2.1 (分析1) 発話量の比較

(1)データをUniDicと形態素解析エンジンのMeCabを用いて、形態素解析し、短単位に区切る。(2)データの見出し語(レンマ化した語彙素)から延べ語数、異なり語数を計算し、各グループの1回目と2回目の発話をSPSS ver.25によるt検定(有意水準5%で両側検定)を用いて統計的有意差の有無を確認した。

#### 4.2.2 (分析2) 特徴語の比較

KH Coder Ver.2.00f (樋口 2014) <sup>注4</sup> を用いて対応分析を行い、発話に出現する語の特徴が作文の有無、1回目と2回目でどう異なるのかを分析する。

### 5. 結果と考察

#### 5.1 (分析1) 発話量の比較

2回の発話と作文の有無の平均延べ語数および標準偏差を

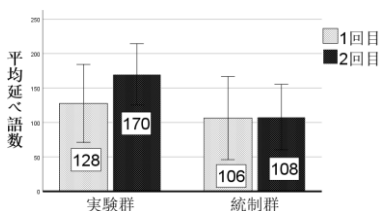


図1 平均延べ語数及び標準偏差

に有意な傾向が示された ( $t(16) = 1.95, p = .07, r = .44$ ) <sup>注5</sup>。一方、統制群では有意な差が認められなかった ( $t(14) = .10, p = .92, r = .03$ )。

次に2回の発話と作文の有無の平均異なり語数および標準偏差を

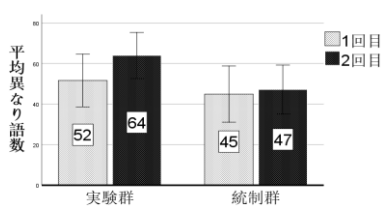


図2 平均異なり語数及び標準偏差

は有意であった ( $t(16) = 2.26, p = .04, r = .49$ )。一方、統制群では有意な差が認められなかった ( $t(14) = .54, p = .6, r = .14$ )。

#### 5.2 (分析2) 特徴語の比較

図3は、2回の発話と作文の有無による頻出語の対応分析の結果である。Aは作文有り、Bは作文無し、1は1回目、2は2回目の発話を示す。作文有りの実験群(A)は、互いが離れたところに位置していることから頻出語の特徴が似ていないこと、2回目は「政府」「経済」「安全」など抽象的な語の出現が確認できる。一方、

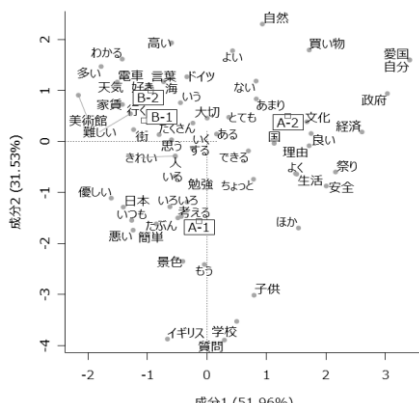


図3 2回の発話と作文の有無による対応分析の結果

作文無しの統制群(B)は、互いが接近していることから、2回の頻出語の特徴が似ていることがわかる。

#### 5.3 考察

本研究結果から、作文を書いたという経験が、発話量では特に語の多様化に影響を与えることが、内容では特に身近な話題から抽象的な話題へと変化させるような影響を与えることが明らかになった。

#### 6. 今後の課題

石黒 (2014: 58-65) は、「書く」行為と「話す」行為は表現という面で近い関係にあり、その二つが連携する活動は、効率よく書く力を伸ばすことができると述べている。本研究では、書く活動を加えることで、発話時の語彙力に影響があることが確認できた。今後の課題として、正確さ、内容の深さなどでどのような影響があるのかを質的に明らかにし、「書く」と「話す」を連携した活動によって、総合的な産出能力の向上につながるということを示していきたい。

#### 注

- 注1 調査は授業外、希望者のみを対象に実施した。
- 注2 Simple Performance-Oriented Test の略(小林 2015)。
- 注3 同じテーマであったが、普段、話す機会が少ないためか、モチベーションの低下は感じられなかった。
- 注4 詳細は <http://kncoder.net/> (2019.6.20 閲覧) を参照。
- 注5  $r$  で示す効果量は、サンプル・サイズによって変化しない、標準化された指標である実質的な差を示している。 $t$  検定では効果大:  $r = .50$ 、中:  $r = .30$ 、小:  $r = .10$  が基準である(水本・竹内 2008)。

#### 参考文献

- 石黒圭編 (2014) 『日本語教師のための実践・作文指導』くろしお出版。
- 小林典子 (2015) 「SPOT」李在鎬編『日本語教育のための言語テストガイドブック』pp.110-126 くろしお出版。
- 菅原和夫 (2011) 「「3分節法」はスピーチを分かりやすくするか—中上級会話クラスのスピーチ改善へ向けて—」『日本語教育方法研究会誌』18巻2号 pp. 46-47。
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。
- 水本篤・竹内理 (2008) 「研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—」『英語教育研究』31 関西英語教育学会 pp.57-66。
- 村田裕美子・石綿由美子 (2013) 「日本語学習者がナラティブを産出する際、どのようなメモを頼りにするか—自動化を目指す発話指導のために—」『ヨーロッパ日本語教育』18 ヨーロッパ日本語教師会 pp.121-126。
- Levelt, W. J. M. (1989) *Speaking: from intention to articulation*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Oxford, R. L. (1990) *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York: Newbury House.
- Swain, M. (1985) Communicative Competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. *Input in second language acquisition*, eds. S.M. Gass & C.G. Madden, pp.235-253. New York: Newbury House.